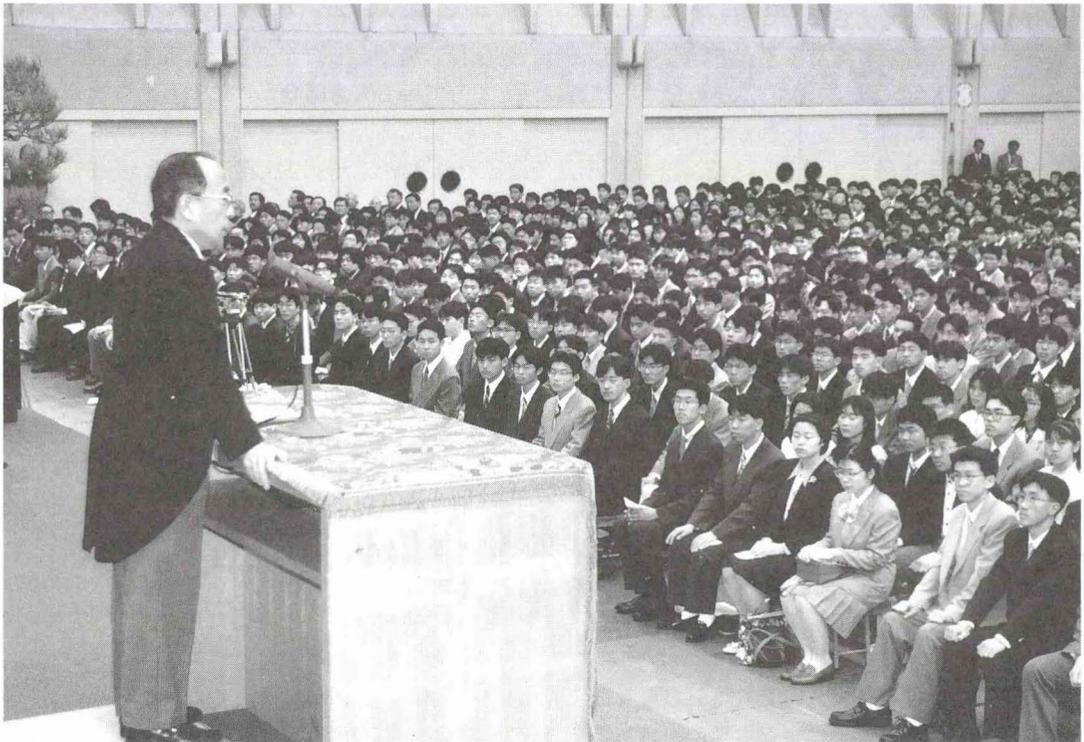


京大広報

No. 465

京都大学広報委員会



平成6年度学部入学式 —関連記事本文768ページ—

目 次

学部入学式における総長のことば……………	763	平成5年度国立学校施設整備事業の決定(追加)……	769
大学院入学式における総長のことば……………	765	京都大学春秋講義(春季講座)の開講……………	770
<大学の動き>		<資料>	
ケベック州大学学長校長協議会との学術交流…………	767	平成5年度京都大学後援会助成金交付者一覧…………	771
名誉教授称号授与式……………	767	日誌……………	773
平成6年度学部入学式……………	768	訃報……………	774
平成6年度大学院入学式……………	769	<コラム>	
平成6年度医療技術短期学部入学式……………	769	20年前の常識	浅田浩二……775
部局長の交替等……………	769		

学部入学式における総長のことば

平成6年4月11日

総長 井村 裕夫

本日ここに元総長、名誉教授の諸先生を来賓としてお迎えし、部局長、教職員の方々とともに平成6年度入学式を挙行し、2,998名の新入生及び43名の編入生の皆さんを京都大学に迎え入れることができますことを、心から嬉しく思っています。長い間努力をされ、めでたく合格の栄冠を得られた皆さんにまず心からおめでとうと申し上げます。それと同時に今日まで皆さんを慈しみ育ててこられた御両親や御家族の方々にも、心からお慶び申し上げます。

今日までの皆さんは、多分自発的であるよりも、強制された形で勉強してきた人が多かったと思います。しかも自分で考えるより、どちらかと言えば与えられたことを消化し、記憶することによって試験を通過してきたと言っても言い過ぎではないでしょう。勉強は苦痛であったと感じた人も多いのではないのでしょうか。大学に入学したら、その分大いに遊ぼうと思っている人も随分多いに違いありません。遊ぶことは大いに結構です。それも大学生活の大切な一つの要素であります。しかし同時に学ぶことの喜び、それを是非体験してほしいと思います。そうでなければ大学に入った意義はないと言ってよいでしょう。

皆さんが何故京都大学を選んだのか、私は一人一人に聞いてみたい気持です。京都大学の伝統あるいは学風に憧れてきた人が多いことを私は希望しています。しかし先生や親から奨められたため、あるいは自分の力をためすため、また京都という町に憧れて京都大学を受験したという人もかなりあるかも知れません。いずれにせよ皆さんは今日から4年間（医学部の場合は6年間）を京都大学で過ごすわけですから、京都大学の特徴をよく知り、独特の学風の中で大いに自分を啓発してほしいと思います。

京都帝国大学（現在の京都大学）は今から97年前の明治30年（1897）に創立され、最初の学生を迎え入れました。京都大学の前に日本にあった大学は明治10年（1877）に創立された東京帝国大学（現在の東京大学）だけあります。京都大学はいわば東京大学と競い合って人材を育成し学問を発展させることを使命として創設されたと言ってよいであらう。

初代総長の木下廣次先生は最初の学生の宣誓式（入学式）で、東京大学とは異なった京都大学のあり方について次のように訓示しました。すなわち、大学生は自重自敬（自分を大切にし、人間としての尊厳を持つこと）、自主独立が重要であり、指導にあたっては細大注入主義（大きいこと、小さいことを全て教え込む）はとらず、自発自得（自ら意欲をもち自分で学ぶ）の誘導につとめたいという趣旨の訓示であります。この言葉は京都大学の教育方針を適確に表現したものとと言えます。

しかし、総長が講演をしたからと言って、すぐ大学の学風ができるわけではありません。京都大学が創設された初期の多くの教授の努力の中から、今日の京都大学の学風が生まれたと言えます。例えば法科大学（現在の法学部）では、当時一般的な教育法であった、暗誦方式の講義法をとらず、演習（ゼミナール）によって自由に討議しながら学ぶ方式が採用されました。そしてその演習において対象としたテーマについて、自分で勉強をして卒業論文をまとめあげることも求められました。当時としては大変斬新な、まさに木下先生の言う「自発自得」をめざした教育法でありました。この方法はその後若干の曲折をへましたが、自ら学ぶことを尊ぶ京都大学の学風の形成に、大きく影響したと思います。

文科大学（現在の文学部）の初期の教授の役割も、また大きかったと私は考えます。文学部は日露戦争のために遅れて明治39年に創設されました。初代の学長（文学部長）であった狩野亨吉先生は生涯を独身で通し、また早く京都大学を退官して市井に隠れ棲み古書の研究に没頭した大変ユニークな哲学者でありました。狩野先生の偉かったところは、学歴や経歴にとらわれず有能な人材を採用したことでありました。その一人が東洋学の基礎を作った内藤虎次郎（湖南）先生であります。内藤先生は秋田の人

で、秋田師範学校を卒業してジャーナリストとして活躍していました。狩野先生が内藤先生を京都大学の教授に推薦した時、官学の経歴がないということで法制局が認めず、「たとえ孔子様のような人物であってもだめだ」と言ったという有名な話があります。内藤先生は結局講師として採用され、文学博士の学位をとって二年後に教授に昇任しました。有名な作家の幸田露伴もやはり官学の学歴がなかったので、講師として暫く京都大学で教鞭をとりました。また自らの禅の体験を、西洋哲学との対決とおして論理化し、後に京都学派と呼ばれる大きな哲学の学派を築いた西田幾多郎先生も、東京帝国大学の選科（聴講生のようなもの）の卒業生で、当時は最高の学歴とは考えられていませんでした。

内藤先生はまだ大阪朝日新聞にいた頃、京都大学に文科ができるなら文献の学問ではなく、実事求是（事実に即して真理を探究する）の樸学（じみでまじめな学問。転じて、清朝の考証を重んじる学問）でないといけないという論説を書いています。勿論この時内藤先生は自分が京都大学の教授になるとは考えていなかったと思いますが、京都大学の教授に就任してからはしばしば中国を旅行して調査を行い、実証的な研究方法によって内藤史学と呼ばれる東洋史学を確立しました。京都大学においては現在もフィールド・ワーク、すなわち現場を歩き、見ることによって学説をまとめるアプローチが極めて活発ですが、そのルーツは案外内藤湖南にあるのかも知れません。

内藤先生は官学の卒業ではなく、ジャーナリストをしながら勉強をしたものですから、様々な本を読み、大変知識が広くしかも多角的に物を見ることのできる人であったようでもあります。それ故にこそ「内藤史学」と呼ばれる幅の広い、重層的、総合的な史学が生まれたのでありましょう。内藤湖南の在野精神、旺盛な好奇心、そして独創性は、いずれも京都大学の学風そのものであります。

私がこういう話をしたのは、皆さんに様々な問題に関心を持ち、自分の目で見、自分の頭で考える勉強法を、京都大学で学んで欲しいからです。勿論大学にも一定のカリキュラムがあり、暗記しなければならないことも多いと思います。しかし高校までと同じように教えられるだけに終わってしまえば、京都大学に在学した価値はないと言ってもよいでしょう。大学こそは「何故」という問いを發し、自分から能動的に学ぶことを身につけるべきところです。

昨年京都でイギリスの王立研究所のクリスマス・レクチャーが開催され、私も一日だけ出席しました。このレクチャーは1826年有名なマイケル・ファラデーによって「青少年のための実験講座」として始められて以来、第二次世界大戦中を除いて続けられ、昨年日本で行われたのは第163回でした。講師は毎年一流の学者で、昨年はチャールズ・スターリングという有機化学者が「分子の利き手」と題して2日間にわたって講義をしました。分子の左右非対称性について、大道具、小道具を用いた大変わかりやすい講義で、しかも聴講者が実験に参加できる場面が沢山準備されていました。青少年に科学への興味を、好奇心を持たせることが主な目的ですが、同時に「何故」と考えさせる要素もあり、素晴らしいレクチャーでした。スターリング教授によりますと、毎年大変な時間をかけて準備しているということで、その努力にはすっかり敬服しました。イギリスには独創的な研究者が大変多く、ノーベル賞の受賞者もコンスタントに輩出していますが、その秘密の一端は、青少年に科学への好奇心を持たせる努力がなされているためではないかと考えます。

新入生の皆さん、皆さんは旺盛な好奇心で様々な問題に関心を持って学んで下さい。学問をすることには勿論苦しみも伴います。しかしそれを乗り越えたときの喜びは、他では味わえない大きいものであります。幸いにして京都大学には多くの秀れた教官や先輩がいます。そうした人々から、自ら考え、解答を探していく「自発自得」の方法を学んで下さい。

皆さんは20世紀の後半、我が国が最も豊かな時期に育った恵まれた世代であります。しかし大学を卒業して皆さんが活躍する21世紀は、激動の時代になる可能性があります。そうした時代に役立つ人材、それは広い視野をもち、自ら考えることのできる人です。京都大学在学中に是非そうした能力の基礎を作って下さい。

これからの学生生活が楽しく、実り多いものになることを祈って、私の式辞に致します。

大学院入学式における総長のことば

平成6年4月11日

総長 井村裕夫

本日ここに元総長、各研究科長、教職員の御臨席のもと平成6年度大学院入学式を挙行し、修士課程1,597名、博士後期課程721名の新進気鋭の諸君を京都大学大学院に迎えることができましたことは、誠に慶びとするところであります。今日までの諸君の努力に対し敬意を表するとともに、心からのお慶びを申し上げます。

今日から諸君は大学院において勉強をすることになりますので、大学院とはどういうところか、その歴史的な発展の過程を少し述べてみたいと思います。世界で最初の大学院大学は1874年に設立されたアメリカのジョンズ・ホプキンス大学であります。それ以前にもアメリカの大学には例えばイエール大学やハーバード大学などに大学院に相当するコースがありました。しかしそれは慣行のようなもので、制度としてまとめたものではありませんでした。それまでのアメリカの大学はジェントルマンを養成するためのものであり、研究を行うところではなかったからです。一方当時のドイツの大学は大学院は持っていませんでしたが、ヴィルヘルム・フォン・フンボルトの理念に基づいて、研究と教育を統一的に行い、世界一高い科学のレベルを誇っていました。従ってアメリカの学者もほとんどがドイツに留学し、大学で研究を行うことの重要性を認識して帰国しました。こうした研究至上主義とも言えるドイツ帰りが集まって、大学院大学ジョンズ・ホプキンス大学が発足しました。この大学院大学の発足は、アメリカの多くの大学に大きいインパクトを及ぼし、研究と専門教育を行う大学院の制度が、次第に発展致しました。1930年以降アメリカの学問は急速に発展しましたが、その原因の一つに大学院の充実が挙げられるのでありましょう。

一方我が国でも1886年（明治19年）にすでに帝国大学の中に大学院が設置されました。従って大学院は我が国でも100年以上の古い歴史を持っていることになります。しかし戦前の大学院は一般的に言っではっきりした教科課程を持たず、どちらかと言えば大学教官養成のための制度であったと言えます。戦後の我が国はアメリカの大学制度を導入し、大学院も修士課程と博士課程に分かれました。しかしアメリカの大学院が多くのプロフェッショナル・スクール（たとえばロー・スクール、ビジネス・スクール、メディカル・スクールなど）を持っているのとは異なって、我が国の大学院は戦前からの影響もあって、大学教官や研究者の育成を使命とするという傾向が濃厚でありました。我が国の大学院が変貌し始めたのは1960年頃からで、工学系や農学系を中心に、専門家の育成という機能も重視されるようになってからであります。特に昨今では大学院の数も収容人員も増し、社会人への門戸も広がっています。大学院は単に専門教育のみでなく生涯教育の一環としての役割も担うようになって参りました。しかし現在でも大学院では、特に博士後期課程では、研究が最も大きい課題であることは従来と変わりありません。

そこで本日は今世紀臨床医学における最大の発見とも言えるペニシリンの発見から実用化までの後を辿って、研究のあり方を考えてみたいと思います。

ペニシリンの発見者アレキサンダー・フレミングはロンドン大学セント・メアリーズ病院の細菌学者であり、1922年にリゾチームという酵素を発見しました。彼はたまたま風邪をひいたので鼻の粘液を細菌を植える培地に塗りつけておいたわけです。一説によると鼻の粘液が偶然落ちたのではないとも言われています。数日後その粘液の周囲に細菌のコロニーがないことに気付いたフレミングは、この粘液の中に細菌を殺す何らかの物質があるのではないかと考えました。そして直ぐにその細菌を試験管で培養し、そこに鼻の粘液あるいは涙を加える実験をしました。そうすると数分間のうちに、細菌で濁っていた培養液が透明になりました。直ちに研究室の全員がレモンを嗅いで涙を集めることに協力させられ

ました。そして鼻の粘液や涙だけでなく、様々な動植物の材料を用いて実験し、リゾチームというある種の細菌を殺す物質が自然界にかなり広く存在することを見出したのであります。

フレミングは使用済みの培地を直ぐに処分せず、2、3週間も放置しておき、処分する前に必ずなにか思いがけない現象が起こっていないか注意深く眺めるのを常としていたそうです。時には他人の注意をひかない現象に注目することが、他人には見えないものを発見することになります。フレミング自身も「普通とちがった外観や出来事を決して見逃してはならない。それはたいてい空騒ぎにおわるが、しかしそれが重要な真理であることもある」と述べています。

このようにしてフレミングはリゾチームという興味ある物質を発見しましたが、それを精製して純粋な形で取り出すことはできませんでした。それは彼やその助手に化学の素養がなかっただけでなく、研究所にも化学者がいなかったからです。従ってフレミングの重要な発見は、余り一般には注目されませんでした。しかしこのリゾチームの研究があったからこそ、フレミングはペニシリンを発見できたわけです。

およそ偉大な科学的な発見には、自発的な探求の部分と、幸運な偶然の部分がありますが、ペニシリンの発見もまさにそうでありました。1928年ブドウ球菌を培養して研究していたフレミングは、ある日一つのシャーレに黴が混入しているのを見つけました。これは完全に失敗の実験ですが、彼はいつもの癖でじっと観察しました。そして黴のまわりのブドウ球菌のコロニーが溶けてしまっていることに気付いたのです。リゾチームの経験のあるフレミングは直ちに次のステップの実験をしました。そしてこの黴が驚くべき強力な菌を殺す物質を含んでいることを証明したのです。この黴はペニシリウム・ルブルムという学名のものであることが、菌類学者により判定されましたので、この物質はペニシリンと名付けられました。このようにフレミングの発見は多分に偶然な幸運にめぐまれていました。しかしフレミング自身「それにしても孢子たちが寒天の上に起き上がって『いいですか、われわれは抗生物質をつくるんですよ』と、私に言ったわけではない」と書いています。やはり注意深い観察と、それまでの研究の蓄積があったればこそ、ペニシリンは発見されたわけです。パストゥールの有名な言葉「『偶然』は、準備のできていない人は助けられない」は、やはり真理であろうと思います。

このようにしてペニシリンを発見したフレミングはそれが極微量で有効であり、治療に応用できる可能性があることを明らかにしました。そして何とか精製したいと考えたのですが、彼自身に化学の知識はありませんでした。間もなくリスター研究所のハロルド・レストリックという生化学者がペニシリンの純化に挑戦しましたが、ペニシリンは不安定な物質で精製は困難であり、実験をしていた研究者が死亡したということもあって結局成功しませんでした。1934年になってフレミングは自分の研究室にホルトという生化学者を雇い入れ、ペニシリンの抽出を試みましたが、これも成功しませんでした。結局ペニシリンの純化は、オーストラリア生まれの生化学者ハワード・フローリーの登場を待たねばならなかったのです。

フローリーはオックスフォード大学で、まずフレミングの発見したリゾチームの研究を行い、1937年にその精製に成功しました。そして更にドイツから亡命してきたエルンスト・ボリス・チェインとともに、より強力な抗菌物質の研究を行うことを計画し、文献を調べてペニシリンを選びました。そしてアメリカのロックフェラー財団からの研究費の助成を受け、1940年に部分的に純化することに成功しました。フレミングが諦めてから数年以上経っていたわけです。フローリーの成功は、本格的な生化学の研究を積んでおり、チェインという良い協力者を得たこと、十分な研究費の助成があったこと、などでありましょう。このようにして純化されたペニシリンは、1941年2月敗血症の患者に投与され、劇的な効果をおさめました。近代医学の輝かしい成功が証明されたわけです。

ペニシリンの発見の歴史は、注意深く粘り強い研究と幸運が大きい発見につながることを教えてくれます。しかし一つの研究が完成するまでには、様々な能力を持った更にも多くの研究者の協力が必要であることも示しています。また、ペニシリンの実用化にあたっては、医師の慎重な配慮と綿密な観察も必

要でありました。「医薬を分娩するのは化学者であるが、それに歩き方を教えるのは医師である」という言葉もあります。臨床医の役割は、目立ちませんがやはり重要であります。

これから皆さんは大学院で本格的な研究を始められることになります。何よりも大切なことはまず地道に、着実に、そして注意深く研究を進めることでありましょう。しかも意外な結果を得たときには、それを大切にしてください。多くの場合フレミングが言うように、それは意味を持ちませんが、時として新しい発見につながる場合があります。そこに研究の苦しみと楽しみがあると行ってよいでありましょう。多くの苦しみを乗り越えて、研究の楽しみが発見できる、そんな大学院の生活になることを祈って私の式辞と致します。

<大学の動き>

ケベック州大学学長校長協議会 との学術交流

本学とカナダのケベック州大学学長校長協議会との「学術交流に関する一般的覚書」が平成6年3月17日に交換された。

ケベック州大学学長校長協議会との学術交流の推進については国際交流委員会の答申（関連記事『京大広報』No.363）に沿って検討が進められ、平成5年9月に協定候補機関となった。その後、同協議会と協議を重ね、平成6年3月25日にケベック州の4大学の使節団代表が総長表敬したとき手交されたものである。

ケベック州大学学長校長協議会の構成大学は、以下のとおりである。

ビショップス大学
コンコルディア大学

ラヴァル大学
マギル大学
モントリオール大学
商科大学
理工科大学
シュルブルック大学
ケベック大学

ケベック大学モントリオール校
ケベック大学トロワ・リヴィエール校
ケベック大学シクチミ校
ケベック大学リムスキー校
ケベック大学ハル校
ケベック大学アピチビ・テミスカミング校
ケベック大学州立科学研究所
ケベック大学アルマン・フラピエ研究所
ケベック大学州立行政学院
ケベック大学高等工科大学
テレビ通信大学

名誉教授称号授与式

4月6日（水）午前10時30分から、名誉教授称号授与式が、京大会館において挙行された。授与式は、部局長の臨席のもとに行われ、称号授与のあと、「総長のあいさつ」があって、午前11時10分終了した。

称号を授与された方は、次の54名である。

（敬称略）

（氏 名）	（推 薦 部 局）
米 田 満 樹	（理 学 部）
卯 本 重 郎	（工 学 部）
吉 川 和 広	（工 学 部）
若 野 省 己	（総 合 人 間 学 部）
岩 井 壯 介	（工 学 部）



（氏 名）	（推 薦 部 局）
遠 藤 裕 久	（理 学 部）
松 浦 重 武	（数 理 解 析 研 究 所）
亀 谷 昶	（農 学 部）
阪 本 寧 男	（農 学 部）
土 屋 義 人	（防 災 研 究 所）

野口昌巳 (農学部)	森本武 (原子エネルギー研究所)
西村三郎 (総合人間学部)	平岡正勝 (工学部)
中澤巷一 (法学研究科)	作花濟夫 (化学研究所)
加茂幸介 (防災研究所)	西川幸治 (工学部)
上原悌次郎 (工学部)	岡道男 (文学部)
藤家龍雄 (総合人間学部)	佐佐木綱 (工学部)
恒藤敏彦 (理学部)	高須達 (数理解析研究所)
濱田啓介 (総合人間学部)	久馬一剛 (農学部)
一瀬光之尉 (工学部)	山室隆夫 (医学部)
金彗潔 (工学部)	竹田俊男 (胸部疾患研究所)
小清水弘一 (農学部)	寺井俊夫 (工学部)
佐藤進 (工学部)	佐野哲郎 (総合人間学部)
岩本光雄 (霊長類研究所)	川又良也 (法学研究科)
米山俊直 (総合人間学部)	西村博行 (農学部)
野村修 (総合人間学部)	上横手雅敬 (総合人間学部)
渋谷巖 (原子炉実験所)	川端季雄 (工学部)
六車熙 (防災研究所)	中川久定 (文学部)
土井悦四郎 (食糧科学研究所)	小寺昭次郎 (総合人間学部)
辻英夫 (理学部)	田端守 (薬学部)
岡田隆夫 (工学部)	古屋哲夫 (人文科学研究所)
常脇恒一郎 (農学部)	山下正男 (人文科学研究所)
佐田榮三 (工学部)	高橋正立 (人間・環境学研究科)

○ ○ ○

平成 6 年度学部入学式

4月11日(月)午前10時から平成6年度学部入学式が名誉教授はじめ来賓の臨席のもとに、本学総合体育館において挙行された。

入学式は、学歌斉唱(京都大学音楽部交響楽団及び京都大学合唱団が協力)に続いて、「総長のことば」があり、午前10時30分に終了した。

今年度の新入生数は、次のとおりである。

学 部	募集人員	入学者数	外国人留学生数			第3学年 編入学者	合 計
			国 費	私 費	計		
総合人間学部	130	134	3		3		137
文 学 部	220	222				10	232
教 育 学 部	60	63				9	72
法 学 部	400	408	1		1	8	417
経 済 学 部	240	241	2	4	6	7	254
理 学 部	326	326				1	327
医 学 部	100	102					102
薬 学 部	80	85		1	1		86
工 学 部	1,060	1,061	2	8	10	8	1,079
農 学 部	325	335					335
合 計	2,941	2,977	8	13	21	43	3,041

法学部と経済学部には、外国学校出身者のための選考試験による入学者16名と6名とが、それぞれ含まれている。

平成6年度大学院入学式

4月11日(月)午後3時から平成6年度大学院入学式が名誉教授はじめ来賓の臨席のもとに、本学総合体育館において挙行された。

入学式は、学歌斉唱(京都大学音楽部交響楽団及び京都大学合唱団が協力)に続いて、「総長のことば」があり、午後3時30分に終了した。

今年度の大学院入学及び進学状況は、次のとおりである。

研究科	修士課程入学者数			博士(後期)課程入学者数										
	入学者	外国人留学生		合計	編入学者 (転入 学者)	外国人留学生		再入 学者	小計	進学者 (入学者)	外国人留学生		小計	合計
		国費	私費			国費	私費				国費	私費		
文学研究科	89	1		90	11	2			13	37	3	2	42	55
教育学研究科	18		1	19	2				2	18		1	19	21
法学研究科	58	2	8	68	1		1	2	4	14	3	4	21	25
経済学研究科	42	3	12	57	2	1	1		4	14		1	15	19
理学研究科	249	5	4	258	24	6	4		34	119	5		124	158
医学研究科					3		2		5	129	5	3	137	142
薬学研究科	62	2		64	3				3	16			16	19
工学研究科	676	12	24	712	49	7	11		67	83	1	5	89	156
農学研究科	191	14	2	207	11	8	10		29	57	5	3	65	94
人間・環境学 研究科	115	4	3	122	4				4	28			28	154
合計	1,500	43	54	1,597	110	24	29	2	165	515	22	19	556	721

平成6年度医療技術短期大学部
入学式

4月7日(木)午前10時から、平成6年度医療技術短期大学部入学式が、名誉教授はじめ来賓の臨席のもとに本短期大学部講堂において挙行された。

入学式は、学長式辞、来賓祝辞があって、午前10時30分終了した。

今年度の新入生数は、看護学科80名、衛生技術学科20名、理学療法学科20名、作業療法学科27名、助産学特別専攻20名の計167名であった。

(医療技術短期大学部)

部局長の交替等

遺伝子実験施設長

本庶 佑医学部教授(医化学第一講座担当)が4月8日遺伝子実験施設長に再任された。任期は平成8年4月7日までである。

平成5年度国立学校施設整備
事業の決定(追加)

平成5年度国立学校施設整備事業のうち、本学関係分(追加:3次補正分)は、次表のとおりである。

事業名	構造・階	面積	備考
教職員施設整備事業 教職員福利施設	R3-1	1,000m ²	Rは鉄筋コンクリート構造
老朽化対策事業 農学部総合館等 改修	R	(27,550)	
老朽基幹設備改善 整備事業 有機廃液処理装置 等 改修		一式	
キャンパス緑化 整備事業 医学部構内囲障改修		一式	
グラウンド・プール 整備事業 北部・吉田グラ ウンド及びプール整備		一式	()内の数値は、改修面積

上記事業の実施に際し、工事周辺部におけるご協力をお願いします。

京都大学春秋講義（春季講座）の開講

本学では、財団法人京都大学後援会の協力の下に、下記のとおり「京都大学春秋講義（春季講座）」を開講する。

本学教職員並びに学生については、各講義とも特別受講枠（無料）30名を設けているので、受講希望者は所属部局の事務担当掛へ申し込むこと。

記

☆月曜講義（5回シリーズ）メインテーマ『テクノロジーと社会』

開 講 日	講 師	テ ー マ
5月16日	経済研究所教授 佐和隆光	「文化」としての技術
5月23日	医学部助教授 米倉義晴	テクノロジーの医学への応用
5月30日	工学部教授 岡崎守男	21世紀・地球・化学技術
6月6日	農学部教授 大山莞爾	植物バイオテクノロジー
6月13日	工学部教授 駒井謙治郎	先端機械技術の展開
定 員	120名	
受 講 料	6,000円（全講義を通しての受講料です。）	

☆水曜講義

開 講 日	講 師	テ ー マ
5月18日	文学部教授 朝尾直弘	秀吉の戦争 ―城で攻め鉄砲で守る―
5月25日	化学研究所教授 新庄輝也	新しい物質をつくる
6月1日	農学部教授 堀江武	コメと稲作 ―その環境と未来―
6月8日	経済学部教授 赤岡功	エレガント・カンパニー ―人にやさしい企業経営―
6月15日	総合人間学部助教授 高橋由典	感情の社会学
定 員	各講義 120名	
受 講 料	各講義 1,200円	

○会 場 法経第二教室

○時 間 午後6時30分～8時30分

○申込締切日 4月28日（木）

○申込方法

① 月曜講義、水曜講義の別々に往復はがきで下記の申込先へ申し込むこと。申込はがきには、住所・氏名・電話番号を記入すること。なお、水曜講義の場合は受講希望日を必ず記入すること。返信はがきにも住所・氏名を記入すること。

② 受講料は、受講決定通知を受領後、指定の口座へ振り込むこと。支払後の受講料は返金しない。

○受講資格は問わない。

○申込み・問合せ先 庶務部研究協力課研究協力掛（内線2041）

<資料>

平成5年度京都大学後援会助成金交付者一覧

京都大学後援会助成事業検討委員会で決定した平成5年度第1類（国際交流事業関係）助成金交付者は、第1種（海外派遣）33名、第2種（海外からの学者招へい）12名、第4種（大学行政上の渡航）3名及び第4種（大学間協定校との交流）4名・1件で、それぞれ次のとおりであった。

1. 第1類第1種（海外派遣研究員）

本学教官が専攻する学問分野等について調査研究のため、海外に派遣される場合に、助成金（往復航空賃及び滞在費）を交付するもので、派遣区分は、若手研究者・長期（概ね1年）、若手研究者・国際研究集会、6カ月、3カ月及び1カ月がある。

派遣区分	所属部局	職名	氏名	派遣地域	研究題目 (国際研究集会等名)
若手研究者	長期	文学部	助手 上村博	フランス	19世紀フランス思想とフェリックス・ラヴェッソンの研究
		工学部	助手 濱口清治	アメリカ合衆国	論理設計の形式的検証に関する研究
		化学研究所	助手 井上正志	アメリカ合衆国	時分割光学的測定を用いた高分子ガラスの局所運動に関する研究
	国際研究集会	文学部	助教授 佐々木徹	連合王国	第6回バークベック・ディケンズ学会「クリスマス・キャロル」出版150年記念大会
		工学部	助手 和田健司	アメリカ合衆国	メタンとアルカンの変換化学に関するシンポジウム
		工学部	助手 長谷川幸雄	アメリカ合衆国	第40回アメリカ真空学会
		農学部	助教授 松井徹	オーストラリア	第15回国際栄養学会
		農学部	助手 田中樹	オーストラリア	第2回国際土壌クラストシンポジウム
		化学研究所	助手 吉村徹	スイス	極限温度耐性タンパク質の構造、安定性、および動力学に関するワークショップ
		化学研究所	助手 廣井善二	アメリカ合衆国	米国材料学会1993年秋年会
		胸部疾患研究所	講師 西村浩一	イタリア	ヨーロッパ呼吸器病学会第3回年次総会
		防災研究所	助手 小泉尚嗣	アメリカ合衆国	米国地球物理学連合秋季大会
		アフリカ地域研究センター	助手 重田真義	エチオピア	第1回国際エンセーネットワークショップ
医療技術短期大学	助手 浅川康吉	台湾	第5回アジア理学療法学会		
6カ月	医学部附属病院	助手 永田靖	アメリカ合衆国	癌温熱化学療法に関する基礎的研究	
	農学部	助手 徳地直子	アメリカ合衆国	森林生態系における水に伴う養分物質の循環	
	環境保全センター	助手 酒井伸一	ドイツ連邦共和国・オランダ	有害廃棄物の管理体系に関する研究—とくに研究廃棄物を中心として—	
3カ月	総合人間学部	教授 山本淳一	フランス	フランス中世文学の研究	
	経済学部	教授 瀬地山敏	イタリア・連合王国・アメリカ合衆国	技術革新の開発・普及・移転と経済社会システムとの関係に関する研究	
	人間・環境学科	助教授 伊従勉	フランス・スイス・イタリア	1920年代ル・コルビュジェ建築・都市論の形成についての研究	
	ヘリオトロン核融合研究センター	助手 長崎百伸	アメリカ合衆国	DⅢ-Dトカマクにおける電子サイクロトロン加熱の研究	

派遣区分	所属部局	職名	氏名	派遣国 (地域)	研究題目 (国際研究集会等名)
1カ月	総合人間学部	助教授	若松佑子	ドイツ連邦共和国・アメリカ合衆国	魚類の発生生物学に関する研究
	文学部	助教授	中村紘一	アメリカ合衆国	南北戦争がアメリカ文学(特に南部文学)に与えた影響
	教育学部	教授	田中昌人	オーストラリア	オーストラリア先住民 Aborigine の学童期における生後第三の新しい発達の力の発生の時期の解明と教育方法の開発に関する研究
	法学研究科	助教授	豊下植彦	ドイツ連邦共和国・イタリア	日独伊戦後政治の比較研究共同プロジェクトの策定
	理学部	助手	嶺重慎	連合王国	活動銀河核における放射機構の研究
	医学部	助教授	高橋玲	アメリカ合衆国	癌抑制遺伝子 RB の人為的発現調節による癌細胞の表現型の変化に関する研究
	薬学部	助手	矢崎一史	ドイツ連邦共和国	ムラサキ培養細胞におけるシロニン合成に関わる分子生物学的研究
	工学部	助手	平尾和洋	フランス	パリ建築規制の流れと都市形成の展開に関する基礎調査
	人文科学研究所	助教授	高田時雄	イタリア	キリシタン中国語学の研究
	霊長類研究所	助教授	松沢哲郎	ブラジル	ヒトを含めた霊長類の認知発達の種間比較と種内比較の研究
	放射性同位元素総合センター	助手	伊藤真	連合王国・ドイツ連邦共和国・スイス	高性能位置感応型比例計数管の開発研究
医療技術短期大学	助手	黒木裕士	アメリカ合衆国	スポーツ障害に対するリハビリテーションおよび理学療法に関する調査研究	

2. 第1類第2種(海外からの学者招へい)

海外から学者、研究者を本学に招へいし、学術活動の発展を図るとともに、本学との共同研究の基盤を固めるため、助成金(往復航空賃及び滞在費)を交付するもので、招へい期間は原則として、1年以内(若手研究者)及び1~3カ月(一般)である。

区分	受入部局	招へい学者名	国名・所属機関・職名	研究題目
若手研究者	医学部	張美洛	中華人民共和国・河南医科大学附属医院・内科首席医師	TSH 受容体自己免疫機構に関する研究
	薬学部	KHAJADPAI THIPYAPONG	タイ・原子力平和利用オフィス・核科学研究所研究員	99mTc-テクネチウム放射性医薬品に関する基礎及び応用研究
	化学研究所	Vincenzo NARDI-DEI	イタリア・フィレンツェ大学・薬理学部講師	細菌2-ハロ酸デハロゲナーゼの構造と機能
一般	文学部	張少康	中華人民共和国・北京大学中文系・教授	日中詩話の総合的研究
	理学部	W.P. Halperin	アメリカ合衆国・ノースウエスタン大学物理学教室・教授	極低温における量子凝縮系の研究
	工学部	Andras Frank	ハンガリー・Eotvos 大学・教授	グラフの連結性とネットワークフローに関する研究
	工学部	Asher Rubinstein	アメリカ合衆国・Tulane 大学・助教授	先進複合材料の変形と破壊に関する微視力学的研究
	農学部	Chultemsyrengiin Renchinmyadag	モンゴル・National Research Institute of Pastoral Animal Husbandry in Gohian Zone・主任研究員	モンゴル乾燥地域における伝統的遊牧家畜生産システムにみられる諸問題とその解決策に関する研究

区 分	受 入 部 局	招 へ い 学 者 名	国 名 ・ 所 属 機 関 ・ 職 名	研 究 題 目
一 般	農 学 部	Aly Nabin El-Bahrawy	エジプト・アインシャムズ大学・助教授	農業用水管理システムと灌漑効率及び水質環境保全との関係
	人 間 ・ 環 境 学 研 究 科	James William Lown	カナダ・アルバータ大学化学科・教授	分子認識性ヘテロ環化合物の合成とミクロ及びマクロ環境への応用
	ウ イ ル ス 研 究 所	Stanley Korsmeyer	アメリカ合衆国・ワシントン大学医学部・教授	bcl-2 のアポトーシス阻止作用と細胞内酸化還元状態の関連
	ア フ リ カ 地 域 研 究 セ ン タ ー	Robert E. Dewar, Jr.	アメリカ合衆国・コネチカット大学人類学講座・準教授、講座長	マダガスカル島における環境変化と動物相の変遷

3. 第1類第4種 (大学行政上の渡航及び大学間協定校との交流)

総長及び総長が大学行政上特に必要と認めたと者の海外渡航に対し、助成金を交付するものである。

所 属 ・ 職 名	氏 名	期 間	渡 航 目 的 国	派 遣 目 的
施 設 部 長	青 板 邦 之	5. 9.10~5. 9.20	フランス, イタリア	ヨーロッパにおける大学等の施設調査
工 学 部 教 授 (国際交流委員会 委員長)	木 村 磐 根	5.10. 9~5.10.24	オーストリア, ドイツ連邦共和 国, イタリア	大学間学術交流及び高等教育に関する調査研究
経 理 部 主 計 課 課 長 補 佐	小 野 祐 治	5.11.22~5.12. 3	タイ, マレーシ ア, シンガポ ール	東南アジア諸国における大学運営及び施設に関する実情調査並びに京都大学東南アジア研究センター海外連絡事務所の管理状況等視察

大学間協定校等との交流に基づく学者の受入れ又はセミナーの開催に助成金を交付するものである。
(学者招へい)

受 入 部 局	招 へ い 学 者 名	国 名 ・ 所 属 機 関 ・ 職 名	研 究 題 目
文 学 部	Andre LACAUX	フランス・パリ第7大学・助教授	フランス文学, フランス絵画論
文 学 部	Marc BUFFAT	フランス・パリ第7大学・助教授	18世紀フランス文学の研究
法 学 研 究 科	John Gareth Miller	連合王国・イーストアングリア大学・教授 副学長	イギリス家族財産法及び相続法 (Laws on Family Property and Succession) に関する比較法的研究
医 学 部	Sarah BOUDALY	フランス・パリ第7大学・講師	自己反応性T細胞受容体に関する研究

(セミナー開催)

申 請 者 所 属 ・ 職 名	申 請 者 氏 名	開 催 期 間	セ ミ ナ ー 名
京都大学—トロント大学合同 セミナー実行委員会代表者 (法 学 研 究 科 教 授)	川 又 良 也	6. 2.15~6. 2.16	京都—トロントシンポジウム —知られざる隣国カナダの理解に向けて—

日 誌

(1994年3月1日~3月31日)

3月1日 評議会 環境保全委員会	23日 博士学位授与式 〃 附属図書館商議会
10日 放射性同位元素等管理委員会	24日 卒業式
13日~14日 入学者選抜学力試験(後期日程試験)	25日 カナダ・ケベック州大学使節団 ラヴァール大学 Guy Bellemare 教授他2名来学, 総長及び関係教官と懇談
22日 アメリカ合衆国アラスカ大学アンカレッジ校 Donald F. Behrend 学長来学, 総長及び関係教官と懇談	29日 評議会 建築委員会
23日 修士学位授与式	

訃 報

船越 奨 薬学部助教授

本学薬学部助教授 船越 奨 先生は、3月22日逝去された。享年42。

先生は、昭和49年長崎大学薬学部を卒業、昭和52年本学大学院薬学研究科修士課程修了、昭和55年2月同博士後期課程退学後、本学薬学部助手を経て、平成元年4月同助教授に就任された。

先生の専門はペプチド・蛋白質化学で、特にペプチド合成化学に関する研究で数多くの業績をあげられた。先生の開発された二価官能性試薬を用いる化学選択的合成ペプチド精製法は、長年の懸案であった固相法合成ペプチドの効率的精製法として国内外から高い評価を受けている。著書として『タンパク質化学11—ホルモン系蛋白質およびポリアミン—』がある。

また、先生は学部及び大学院学生の教育・研究指導にも熱心に取り組み、多数の優秀な後進の育成に尽力された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(薬学部)

西山卯三 名誉教授

本学名誉教授 西山卯三 先生は、4月2日逝去された。享年83。

同名誉教授は、昭和8年京都帝国大学工学部建築学科を卒業後、住宅営団技師、本学講師、営繕課長、助教授を経て、昭和36年工学部教授に就任、同49年に退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

先生の専門は、建築計画学及び地域生活空間計画学で、中でも住居学・住宅計画学の研究において数多くの優れた研究業績を残された。主な著書に『住居論』、『住宅計画論』、『日本のすまい』、『地域空間論』、『住宅問題講座(編著)』、『21世紀の設計(編著)』等がある。また日本建築学会副会長、日本学術会議会員(第5～9期)を務められ学術体制の発展に寄与された。これら一連の研究活動、学術上の貢献に対し、昭和61年日本建築学会大賞を受賞され、同58年には勲二等瑞宝章を受けられた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(工学部)



